

マダム貝聞録

No. 4 フィジーの水事情

藤井由佳(協同総合研究所)



フィジーで生活していて何が一番困ったかということ、水道から水が出なかったことです。日本では、蛇口をひねればいつでもどこでも水が出る。時々、断水はあるけれども、何月何日のどの時間に断水する、という連絡が事前に来ます。水が思うように手に入らない環境で暮らして、やっと、水がどんなに大切なものかわかりました。幸いにして、私の家では電気が使えましたが、水と電気を比べてどちらが大切かというと、やはり水です。電気が無いと、夜は暗いし、冷蔵庫やパソコンを使うことはできませんが、生きていくことはできます。でも、水が無いと、料理ができないし、体をきれいにすることもできません。何をすることも水が必要なのです。

学校で暮らし始めて数ヶ月は、いつも水のことばかり考えていました。私の一日の予定は、水の有無によって決められていたと言ってもいいかもしれません。それではフィジーの水事情を紹介します。

フィジーの水事情

水道

フィジーには水道がある。普通は蛇口をひねれば水が出る。しかし、地域によっては水道事情に差があり、私が住んでいた学校は丘の上にあるという悪条件も重なり、断水ばかりだった。決まった時間に断水になるのではなく、不定期で予測不可能だった。だから、思いつけば蛇口をひねって、水が来ているかどうか確かめていた。夕方6時から朝5時までにはほとんど出ていたことがなく、とりあえずこの時間は出ないと考えたほうが良かった。不思議なことに、慣れてくると、水が来そうだな、止まりそうだなという

ことがなんとなくわかるようになった。どこからともなく、水の流れてくる音を感じるのだ。

現地の人々も、もちろん水が来るのを心待ちにしている。ただ、蛇口をひねったあと、水が来ないと蛇口を閉めないという悪い癖を持っている。ほとんど全員。水が来たときにわかりやすい、と言うが、その水がいつ来るかわからない。突然来たときに誰もそばにいなければ水が無駄になるだけだ。でも、その癖のおかげで、どこからか閉め忘れた蛇口から流れている水の音を私は聞くことができるのかもかもしれない。

水が出ると本当にうれしい。その日一日が明るくなる。水が出ないと、「おはよう、

の代わりに、“No water.”、があいさつになる。しかし、断水のあとの水は汚い。はじめは茶色で、だんだん黄色くなり、なかなか無色透明にならない。雨水と比べると、見た目は雨水のほうが断然きれいで、雨水のほうを飲み水にしたくなる。実際、現地の人々は、水道水より雨水のほうがきれいという意識を持っていて、雨水を大切に使う傾向がある。

フィジーの水事情は、確かに砂漠や大陸内部の国々よりも深刻ではない。雨季（12月～4月）には大量に雨が降る。アフリカ大陸のケニアでは、週に2日か3日、水で湿らせたタオルで体を拭くことができれば良いという地域もあるそうだ。しかし、現実に水道から水が出ないとなると、水を得ることができない。歩いて5分で海に行けるが、海水をなんとか使えるのはトイレの水を流すときくらい。そこで、三種の神器ではないけど、一家にひとつ欲しいのは、雨水を溜めるタンクである。屋根に付けた樋からパイプを伸ばして、タンクに設置する。そうすると、屋根に落ちた雨水が一気にタンクに流れ込んでくる。スコールのような雨が多いので、雨季にはかなりの量が溜まる。一方、乾季（5月～11月）には雨水だけでは生活できなくなるので、水道が出るときにホースを使ってタンクに水を溜めておく。時間が経てば水中の浮遊物は沈殿するので、きれいな上澄

みを使う。

それにしても、なぜ水道から水が出ないのか。小さな島はともかく、私の家は一番大きな本島にある。雨は大量に降っているのに、なぜ水が無いのか。住み始めた頃は、学校が丘の上にあるので水が上がりにくいのだと思っていたが、ある日、二つの衝撃の事実を知らされた。ひとつは、この周辺の村人たちが、いつも蛇口を開け放しにして水を無駄使いするから、なんと、水道局の係りが、大元の栓を閉めてしまうというのだ。人々は、いつ水が来るかわからないから蛇口を開けておき、水道局の人はいつも蛇口を開けたままにするから元栓を閉める。どちらの言い分ももっともだけれど、問題は何も解決しない。二つ目は、水道管の太さ。良く調べてみると、元のほうから順に太くなっているらしい。普通は水压を保つために細い管を使うか、もしくは順に細くしていく。太い水道管では、水が蛇口まで来るまで一苦労なのだった。



私の家にあった水タンク

このように、フィジーの水不足は、人為的なものだったということがわかって、私は腹が立つというよりも、むしろほっとした。水道局が調節しているのなら、人の生死に関わるほど長い期間、水を止めることはしないだろうと思ったからだ。タンクの水を細々と使っていけば、なんとかなることがわかって安心した。

日常生活

トイレは、一応、水洗の形態をしているが、水圧が高いときでないとう水洗の機能を使うことはできなかった。そのため、普段は、バケツに溜めておいた水を直接便器に流していた。初めは、便器の後ろにある貯水タンクの蓋をわざわざ開けて、水を入れてから流していたが、すぐに面倒になった。現地の人ができるだけ高い所から便器に向かって水を流すのが良いと言っていたが、飛び散るのでやめた。トイレに使う水は汚くていいので、洗濯に使った水をよく使った。

毎日暑くて汗をかくので、シャワーは欠かせない。髪の毛も洗いたい。でも水がない。そういうときは、バケツ一杯ですべて行う。やってみれば意外とできるものだ。大変なのは冬で、日本のように寒くならないとは言え、気温20度くらいのときに、外で水を浴びるのは難しい。だからどうしても寒いときは、お湯を沸かして水と混ぜて使った。寮の生徒たちは、大人数でお湯を用意してられないので、水を浴びる前にラグビーやバレーボールをして体を温めていた。彼らもとてきれ好きで、一日に2回は体を洗う。朝、



時々、生徒にタンクを洗ってもらった。こういう仕事はみんな大好き。小さい子が中に入れてきれいにしてくれる。

学校に行く前と夕食の前、教会に行く前などには必ずきれいにする習慣がある。

洗濯は手洗だった。電気があるので洗濯機も使えるが、洗濯機を使えるほど水を大量に確保することができないことが多かったので、毎日少しずつ洗った。バケツに洗剤を溶かして衣服をつけておく。汚れが浮いてきた頃に、もみ洗いをする。何回かすすいで、しばって干す。脱水はうまくできないが、陽射しが強いのですぐに乾く。長時間干しておく、衣服の色が変わってしまうくらいだった。雨が突然降ったりもするが、よく考えれば、雨水で洗ったりもするわけだから、放っておいても良い。時が経てば乾く。

山の中の小学校には、遠くの村から通う子どものために寮があった。放課後になると、一年生でも自分の洋服を洗濯する。近くには水のきれいな川があって、小さな手で一生懸命洗う。そんな姿を見ると、切なくなってしまうが、ところで、彼らはどのように洗濯するのか。彼らはきれい好きで毎日洗濯をする。洗濯機も普及してきたが、まだまだ手洗いしているところも多い。板に服を貼り付けて、洗剤をまぶし、タイルを磨くブラシのようなもので思い切りこする。布地の質が悪いのと、こする力が強いので、服はすぐにほつれてしまう。それでもこすってきれいにする。すすぎは一度だけで、あまり水は使わない。日差しが強く、速く乾くので、そんなに絞らずに干す。生徒が時々、洗濯してあげる、と言ってくれたが、彼らのようにこすってもらったら困ると思ってあまり頼まなかった。

都市部の水不足

普段は水がよく出る首都スバの水道も、一時期出なくなってしまうことがあった。水が無くなる心配がないので、水タンクを



水溜めに上がってポーズをとる生徒たち。穴から手を伸ばして上澄みの水をすくう。

設置している家が少ない。バケツを何個も買い込み、配水車が来るのを待っている人々の姿をニュースでよく見た。しかし、この騒動も自然に起きた水不足ではなく、人為的なものだった。新聞によると、水道局が賄賂で資金を使い果たしてしまったらしいのだ。PWD(Public Water Department)と scam という文字が躍っていた。どこの国で

も賄賂は行われることがあるだろうけれど、運営ができなくなるまで使ってしまうなんて。

水質

改善された水源を利用する人の比率(表1)を見てみると、フィジーの数字が低くて驚いた。やはり汚かったのだ。識字率や就学率は100%に近いのに、水は衛生的ではない。発展の仕方でも国によっていろいろである。教育も大切だが、生きるためには水は不可欠だ。水が原因で、様々な皮膚病が蔓延するし、寄生虫も増える。私の学校の寮生が利用していたコンクリート製の水溜めは、内壁に苔がびっしり生えていたし、水のはけ口がないので、水溜めを洗ってもすすぎができなかった。そのため、いつも上澄みの水をバケツですくって使った。それを料理にも使ったし、体を洗うのにも洗濯にも使った。皮膚病にかかる生徒は多く、痒みや痛みで授業に集中できないこともあった。

表1 世界の指標

	改善された水源を利用する人の比率(%) 2000年	成人の識字率(%) 2000年		初等教育就学率(%) 1997 2000年	
		男	女	男	女
日本	-	-	-	100	100
フィジー	47	95	91	99	100
オーストラリア	100	-	-	95	96
パプアニューギニア	42	71	57	88	80
トンガ	100	-	-	92	90
パラオ	79	-	-	100	100
サモア	99	99	98	98	95
アフガニスタン	13	51	21	42	15
バングラデシュ	97	49	30	88	90
ブータン	62	61	34	58	47
カンボジア	30	80	57	100	90
ネパール	88	59	24	77	67
パキスタン	90	57	28	83	48
ミャンマー	72	89	81	84	83
タイ	84	97	94	87	84
ウガンダ	52	78	57	100	100
ケニア	57	89	76	68	69

世界子供白書2004より

番外編：風邪をひいたとき

フィジーで生活を始めてから2ヶ月程経ったとき、いつものように学校から帰ってくると、頭が痛い。風邪かなと思ひ、熱を測ってみると微熱があった。フィジーには、パナドールという風邪薬があって、何かあるとみんなすぐに服用していた。ちょっと興味もあって早速飲んでみようと思ったが、家に一錠もない。そういえば学校に赴任するときに、健康管理員から二箱くらい渡されていたが、近所に「パナドールある？ちょうだい。」といわれる度にあげていたので、あつという間になくなったのだった。そこで、私もみんなのように、誰か持っている人を探しに行くことにした。まずはいつもお世話になっている家族の家へ。「パナドール持ってる？」と聞くと、「どうしたの？風邪？熱？」と、とても心配されてしまった。「夕食はうちに来るのよ。栄養をつけなきゃいけないよ。」と夕食にも呼んでくれた。お言葉に甘えて夕食時に伺うと、「風邪をひいた時にはね、水をいっぱい飲むのよ。冷やしておいたからおいしいわよ。」と言われ、2リットル入りのペットボトルを目の前に置かれた。「ちょっと待てよ。」と私は思った。この水はどこから持ってきた水なんだろう。水道ではない。なぜかという、その日は朝から水が出なかった。もちろん、彼らはフィジー・ウォーター（市販のミネラル・ウォーター）を買うこともない。とすると、これは

きつと、タンクに溜めてあった雨水だろう。体の具合が本調子でないときに雨水を飲むのは少し抵抗があるが、せっかく用意してくれたのだから飲ませていただこう、と思って飲んだ。食事もとてもおいしかった。しかし、問題はその夜だった。

食事が終わると、お礼を言って家に帰った。すぐに寝たが、すぐに目が覚めた。お腹が痛くて吐き気がする。慌ててトイレに駆け込んだのが5回以上。原因は明らかに、あの水。やっぱり飲んではいけなかった。いつもなら大丈夫だが、抵抗力がなくなっているときに飲むのは危険なのだ。

それからは水には本当に気をつけて生活した。飲み水はできるだけフィジー・ウォーターにして、どうしても雨水しか得られないときは、沸騰させてから飲む。困るのは、他所に呼ばれたときだが、そのときはとにかく体の調子を良くしておく。貴重な雨水を出してくれたときになかなか断れないから。

不便なことにはなかなか慣れないけれど、便利なことにはあつという間に慣れてしまう。日本の家ではボタンをピッと押せば、バスタブにお湯が自動的に張られる。洗濯機は全自動。衣服の品質によって洗い方も選ぶことができる。この便利さには、何の抵抗もなく、すぐに慣れてしまったと思う今日この頃である。

Ogo na siga katakata tale e?
(オゴ ナ シガ カタカタ タレ エ?)
今日も暑いですね。